花壇づくりのヒント１２か月

１月　冬の花壇管理

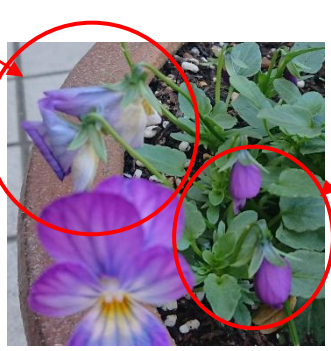
明けましておめでとうございます。年が明けて寒さが厳しくなる季節です。秋に植えた草花や球根植物もじっと寒さに耐え、花壇全体がお休みしているように感じられます。そんな中でも、植物たちは春の成長に向け、土の中で準備を進めています。今回は花いっぱいの春に向け、冬におこなう花壇のお手入れ方法をご紹介します。

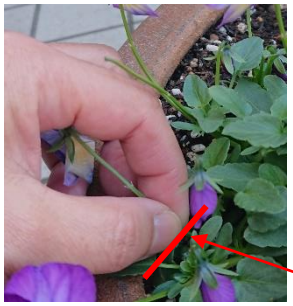
１．花がらを摘みましょう

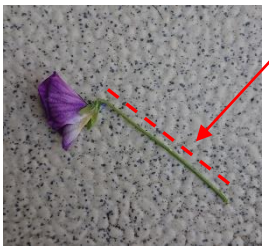
寒さに強いパンジーなどは冬の間も花を咲かせ、種をつけます。種ができると、種を育てるために栄養が取られ、株が弱るので、こまめに花がら（咲き終わった花）を摘んであげましょう。

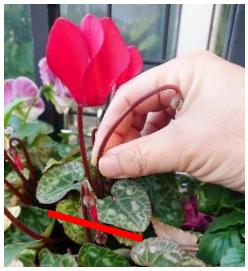
（１）　パンジー・ビオラ、ガーデンシクラメン、カレンジュラ、ノースポール　など

終わった花だけ摘むと、花茎が残って黄色く枯れて目立ちます。**花茎のもとから摘みます**。








ここで切る

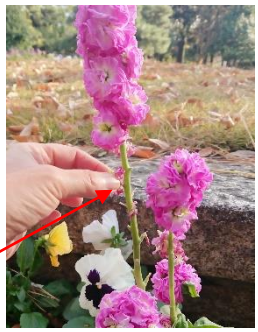
ここで切る

次の葉の上で切る

（２）ストック、キンギョソウ　など

下の花から順に咲き終わりますので、摘んでいきます。

一番上まで咲き終わったら、**花茎を葉があるところまで切り戻す**と、脇からまた花が咲いてきます。



※花がらが残っているとカビが発生して病気の原因にもなります。

枯れた葉も取ってあげましょう。

ハボタン等も外側の葉が黄色く枯れ、触ると簡単にポロっと取れるようになったら、取ってあげましょう。無理に引っぱって取らないように気をつけて。

2．肥料をやりましょう

秋に花を植えてから１～2 か月が経ち、はじめに与えた肥料の養分が徐々に薄れてきます。春の開花に向け、追加で肥料を施しましょう。

（１） 肥料の３要素

肥料には、植物の葉、花、根の成長に特に重要な成分である窒素（N）、リン酸（P）、カリウム（K）がバランス良く含まれています。

肥料の三大要素（三要素）

（２）肥料の種類

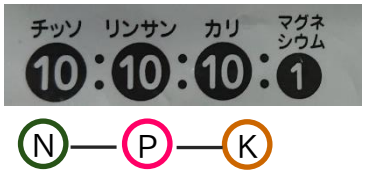
植物を植える前に土に混ぜ込んでおく肥料を元肥（もとひ、もとごえ）、成長に合わせて追加して与える肥料を追肥（ついひ、おいごえ）といいます。元肥には長い間効き目が続く、緩効性の肥料を使い、追肥は求める効き目によって、緩効性肥料や速効性肥料（液体肥料が多い）を使い分けます。

- 冬の追肥には・・・
  春まで長く効く、**緩効性の固形肥料**が使いやすくておすすめです。

※速効性肥料は春などの生育旺盛な時期がおすすめ。

～肥料袋で三大要素の量を見てみよう～

◆平行型：三大要素が等分
（元肥・追肥どちらにもおすすめ）



◆山型：花や実を育てるリン酸が多い
（追肥におすすめ）

（３）追肥の方法

- 株元から少し離れた場所に粒状の化成肥料では 1 株 3 粒程度、細かい粒状の場合はティースプーン 1 杯程度を与えましょう。

※　肥料に記載された量を守って、与えすぎに注意しましょう。

3．水やり

冬は水やりを忘れがちです。土が乾いていたらたっぷり水をあげましょう。
土に指を差し込んで、第一関節ぐらいまで乾いていたら水やりのタイミングです。

冬から春にかけての寒い時期は、温かい時間帯に水やりしましょう。
チューリップなどの球根を植えた場所にも忘れずに！！

冬は花壇のデザインを考えたり、もともと植えてある宿根の植物や樹木を配置し直すチャンスです。

★次回 2 月は『多年草の株分け』をご紹介します。

※資料は個人でのご活用に留めていただけますよう、よろしくお願いします。